

不知火 港の街

著者	雪の嶋人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 0
ページ	1 0 6 - 1 0 7
発行年	1916-03-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/6594

不知火

——二月二日夜、物知り人の見給はざる不知火を見る——

一二、丙 雪 の 嶋 人

筑紫の國有明海の不知火と里の乙女とあはれ吾が見と
君と俱に彼の夜不知火見むとして霜置ける夜を山越に亘る
龍燈かあらゝ數十のまんまろな赤き灯玉の闇にうかぶは
あはれ神許し給ふや吾れをしも龍燈を見し兒等の一人と
龍燈を見むとて人はよもすがら酒をたうべて歌うたうかも
不知火は出でずかもあれ癡人の蜜蜂の如く酔ひ伏すを忌む
此夜吾れ放歌亂舞の一群の中にまじりて寂しむといふ
かにかくに筑紫の兒等はいとしかりわだつみ夜半の灯知る故

港 の 街

水にゆらぐ灯影は寂びてむら消れて更け行く北の夜の港街
うつとりと狭き書齋にうなだれて物をおもへば潮鳴りのする
かもめごり入日の後の静寂侘びてさはな嘆きそ吾がともに在り

とりどりの色に染まざる白鳥の如くにひとり漂はむかな
潮鳴か小夜の嵐かこれやこの港の街を三味のながるゝ
まれに來てまたしぬびかに行く船の航跡流の蒼白みかも
朝宵は物もなき海しんとして時たま氷を飛ぶ魚のあり

思ひ出

一部二年甲一

鹽谷安喜

おぼろげの幼き旅の思ひ出は長き坂にも残りけるかな

父とこし幼き我れの旅姿石段上る少年に思ふ

——二首本妙寺にて——

ばか／＼とあたゝみに午後までわみていらだつ心追はるゝ如くに
頼なき寂しき心家出ではじめて知りぬ旅にやむとき
戀もなく望もなくてたゞひとり机の前に思ふ今日の日
雨の日の寄宿舎は寂しかり樋の音して日は暮れてゆく
辞書くりて一字拾ひて終るときかなしく我れの行手を思ふ
蝙蝠を合傘さしてぬれつゝも二人話して歸る雨の日
玻璃の窓霜夜の氷繪模様君の姿に氷れりと見る
にくしみに人にはなれずぬるやは人をあはれむ我が思ひ哉